歎正

異信

偈抄

東洋生命保險株式會社
奉公部

修養叢書　第五篇

特263
16
34
8

始

特263
16

欺正

異信

偈抄

親鸞上人傳

親鸞上人、淨土眞宗の開基、親鸞は法諱、善信房と稱す、俗姓は藤原氏、從一位內麿公の末孫、皇太后宮の大進有範卿の息男にして高倉天皇の承安三年四月一日に生る。幼にして父を失ひ伯父範綱卿に養はる。仲父宗業卿（文章博士）に從つて儒典を修む。天性岐嶷、夙に出塵の志あり。養和元年春年甫めて九歳にして青蓮院大僧正慈鎭の門に入りて剃度し、叡山に登つて天台の教觀を精錬し、兼て諸乘を極め碩學の譽あり。建仁元年の春二十九歳にして吉水の源空（法然）聖人に謁して親しく淨土易行の妙教を受け、一聞即悟直に玄旨に契へり。源空亦慈育篤く元久二年特に撰擇本願念佛集を附屬せらる。是より先源空の命により九條兼實の女を娶る、蓋し兼實の請に因るものにして、念佛往生には僧俗の別なきを顯示すと雖も、是れ教界未曾有の事實にして、所謂眞俗二諦の教義は正に此處に濫觴せるなり。偶々承久元年念佛弘通の停止に遭ひ源空土佐に配流せらるるや、親鸞も亦俱に罪に坐して俗名藤原善信の稱を以て越後國府に流さる。建暦元年勅赦あり、乃ち京に歸らんとし、不圖源空入寂の報に接す。乃ち和田賴重の請を容れて常陸國笠間稻田に赴き、草庵を結んで念佛を弘通し、傍ら教

義を究めて教行信證文類の撰述に從ひ、元仁元年其稿を脫せり。該書は眞宗の本典とも云ふべきものなるを以て、後年是年を以て眞宗開基の時となす。建仁元年北條泰時の請に應じて鎌倉に赴き、親しく一切經を校合する事あり。嘉禎元年稲田を去つて京に歸り、なほ化導を怠らず。開教の男女四集し、法燈の盛なる、源空在世の時に遜らず。弘長二年十一月病あり、廿八日遂に示寂す、壽九十。明治十年朝廷諡を賜ひて見眞大師と曰ふ。大師一代の著述は、教行信證文類六卷を始めとし、淨土文類聚抄一卷、愚禿鈔二卷、入出二門偈一卷、和讃三帖、三經往生文類一卷、尊號眞像銘文一卷、唯信鈔文意一卷、一念多念證文一卷等あり。文類聚鈔以下の諸部は皆歸洛後の作に依る。今本叢書の刊行に當りては、大師の作として最も世に膾炙する所の正信偈、大師の語錄を集輯して其信仰を明示したる歎異鈔の二を取り、之に註釋を施して一卷となせり。

（參考　前田慧雲氏著正信偈講話）

正信念佛偈解題

正信念佛偈一卷は教行信證文類の第二、行卷の末尾に附せらるゝ偈頌にして略

して正信偈といふ。全文六十行百二十句の短篇を以てして、よく本宗教義の大綱を傳へて餘蘊なし、眞宗教徒は日夕之を佛前に勤供す。全章の初二句は歸依する佛體の壽明光明の二德を擧げ、次の四十二句は淨土三部經（大、觀、小）の正意を以て彌陀因位のこと、證得の佛德、釋尊の眞說を述べ、「印度西天」以下七十六句は眞宗の七祖（龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空）の德と所說を嘆じ、道俗の輩まさに高僧の說を信ずべき旨を以て結べり。尙本篇には別に多田鼎氏譯正信念佛偈（同氏著正信偈講話卷頭所載）を併せ掲げたり。

歎異鈔解題

歎異鈔一卷は、親鸞の直弟が直話を編輯して他力信仰の極致を傳ふるの書。編者は詳かならず、或は唯圓、或は覺如、或は如信の編に成るといふ。全篇十八節より成り、初の十節は全く親鸞の言を傳へ、後の八節は編者が聖人滅後の異義を嘆きて、親鸞の語を引用しつゝ以て批判を加へたるものなり。

（兩書解題參考　模範佛教辭典）

正信念佛偈

歸命無量壽如來
南無不可思議光
法藏菩薩因位時
在世自在王佛所
觀見諸佛淨土因
國土人天之善惡
建立無上殊勝願
超發希有大弘誓
五劫思惟之攝受
重誓名聲聞十方
普放無量無邊光
無礙無對光炎王

無量壽(二)如來に歸命し
不可思議光(六)に南無したてまつる
法藏菩薩(七)因位(八)の時
世自在王佛の所に在して
諸佛の淨土の因(九)
國土人天の善惡(一〇)を觀見して
無上殊勝の願(一一)を建立し
希有の大弘誓(一二)を超發す
五劫(一三)、之を思惟して攝受す(一四)
重ねて誓ふ(一五)らくは名聲十方に聞えんと(一六)
普く無量(一七)、無邊光(一八)、
無礙(一九)、無對(二〇)、光炎王(二一)

清淨歡喜智慧光
不斷難思無稱光
超日月光照塵刹
一切群生蒙光照
本願名號正定業
至心信樂願爲因
成等覺證大涅槃
必至滅度願成就
如來所以興出世
唯說彌陀本願海
五濁惡時群生海
應信如來如實言
能發一念喜愛心
不斷煩惱得涅槃

清淨、歡喜(二二)、智慧光(二三)
不斷(二四)、難思(二五)、無稱光(二六)
超日月光を放ちて塵刹(二七)を照す(二八)
一切群生光照を蒙る(二九)
本願の名號は正定の業なり(三〇)
至心(三一)信樂の願(三二)を因と爲す(三三)
等覺(三四)を成じ大涅槃(三五)を證することは
必至滅度の願(三六)成就なり
如來世に興出したまふ所以は(三七)
唯彌陀の本願海を說かんとてなり(三八)
五濁(三九)惡時の群生海
應に如來如實の言を信ずべし(四〇)
能く一念喜愛の心を發すれば(四一)
煩惱を斷ぜずして涅槃を得

凡聖逆謗齊廻入
如衆水入海一味
撥取心光常照護
已能雖破無明闇
貪愛瞋憎之雲霧
常覆眞實信心天
譬如日光覆雲霧
雲霧之下明無闇
獲信見敬大慶喜
即横超截五悪趣
一切善悪凡夫人
聞信如來弘誓願
佛言廣大勝解者
是人名分陀利華

凡聖逆謗　齊く廻入すれば
衆水、海に入りて一味なるが如し
撥取の心光、常に照護したまふ
已に能く無明の闇を破すと雖も
貪愛瞋憎の雲霧
常に眞實信心の天に覆へり
譬へば日光の雲霧に覆はるれども
雲霧の下　明にして闇無きが如し
信を獲れば見て敬ひ大に慶喜すれば
即ち横に五悪趣を超截す
一切善悪凡夫人
如來の弘誓願を聞信すれば
佛は廣大勝解の者と言ふ
是人を分陀利華と名く

彌陀佛本願念佛
邪見憍慢惡衆生
信樂受持甚以難
難中之難無過斯
印度西天之論家
中夏日域之高僧
顯大聖興世正意
明如來本誓應機
釋迦如來楞伽山
爲衆告命南天竺
龍樹大士出於世
悉能摧破有無見
宣說大乘無上法
證歡喜地生安樂

彌陀佛の本願念佛は
邪見、憍慢、惡衆生
信樂受持すること甚だ以て難し
難の中の難、斯に過ぎたるは無し
印度西天の論家
中夏日域の高僧
大聖興世の正意を顯し
如來の本誓機に應ぜることを明す
釋迦如來楞伽山にして
衆の爲に告命したまはく、南天竺に
龍樹大士世に出でゝ
悉く能く有無の見を摧破せん
大乘無上の法を宣說し
歡喜地を證して安樂に生ぜんと

顯示難行陸路
信樂易行水道樂
憶念彌陀佛本願
自然即時入必定
唯能常稱如來號
應報大悲弘誓恩
天親菩薩造論說
歸命無碍光如來
依修多羅顯眞實
光闡横超大誓願
廣由本願力廻向
爲度群生彰一心
歸入功德大寶海
必獲入大會衆數

難行の陸路の苦きことを顯示して
易行の水道の樂しきことを信樂せしむ
彌陀佛の本願を憶念すれば
自然に即時に必定に入る
唯能く常に如來の號を稱して
應に大悲弘誓の恩を報ずべしといへり
天親菩薩論を造りて說かく
無碍光如來に歸命したてまつる
修多羅に依りて眞實を顯して
横超の大誓願を光闡す
廣く本願力の廻向に由りて
群生を度せんが爲に一心を彰す
功德大寶海に歸入すれば
必ず大會衆の數に入ることを獲

得至蓮華藏世界
即證眞如法性身
遊煩惱林現神通
入生死薗示應化
本師曇鸞梁天子
常向鸞處菩薩禮
三藏流支授淨教
焚燒仙經歸樂邦
天親菩薩論註解
報土因果願誓願
往還廻向由他力
正定之因唯信心
惑染凡夫信心發
證知生死即涅槃

蓮華藏世界に至ることを得れば
即ち眞如法性の身を證せしむ
煩惱の林に遊びて神通を現じ
生死の薗に入りて應化を示すといへり
本師曇鸞は、梁の天子
常に鸞の處に向ひて菩薩と禮したてまつる
三藏流支(五四)淨教を授けしかば
仙經を焚燒して樂邦に歸したまふ
天親菩薩の論を註解して
報土の因果、誓願に願す
往還の廻向は他力に由る
正定の因は唯信心なり
惑染の凡夫信心發すれば
生死即涅槃なりと證知せしむ

必至無量光明土
諸有衆生皆普化
道綽決聖道難證
唯明淨土可通入
萬善自力貶勤修
圓滿德號勸專稱
三不三信誨慇懃
像末法滅同悲引
一生造惡値弘誓
至安養界證妙果
善導獨明佛正意
矜哀定散與逆惡
光明名號顯因緣
開入本願大智海

必ず無量光明土に至れば
諸有の衆生皆普く化すといへり
道綽は聖道の證し難きことを決して
唯淨土の通入す可きことを明す
萬善の自力、勤修を貶す
圓滿の德號、專稱を勸む
三不(六〇)三信の誨慇懃にして
像末法滅(六一)同じく悲引す
一生惡を造れども弘誓に値ひぬれば
安養界に至りて妙果を證せしむといへり
善導獨り佛の正意を明にせり
定散(六四)と逆惡とを矜哀して(六五)
光明名號(六六)因緣を顯す
本願の大智海に開入すれば

行者正受金剛心
慶喜一念相應後
與章提等獲三忍
即證法性之常樂
源信廣開一代教
偏歸安養勸一切
專雜執心判淺深
報化二土正辨立
極重惡人唯稱佛
我亦在彼攝取中
煩惱障眼雖不見
大悲無倦常照我
本師源空明佛教
憐愍善惡凡夫人

行者正しく金剛心を受けしめ
慶喜の一念相應して後
章提(六八)と等しく三忍を獲
即ち法性の常樂を證せしむといへり
源信廣く一代の教を開きて
偏に安養に歸して一切を勸む
專雜執心、淺深を判じて(七〇)
報化二土正しく辨立せり
極重の惡人は唯佛を稱すべし
我亦彼攝取の中に在れども
煩惱眼を障へて見ずと雖も
大悲倦きこと無して常に我を照したまふといへり
本師源空は佛教に明にして
善惡の凡夫人を憐愍し

眞宗教證興片州
選擇本願弘惡世
還來生死輪轉家
決以疑情爲所止
速入寂靜無爲樂
必以信心爲能入
弘經大士宗師等
拯濟無邊極濁惡
道俗時衆共同心
唯可信斯高僧說

眞宗の教證を片州(七二)に興し
選擇の本願を惡世に弘む
生死輪轉の家に還來ることは
決するに疑情を以て所止と爲す
速に寂靜無爲の樂に入ることは
必ず信心を以て能入と爲すといへり
弘經の大士宗師等
無邊の極濁惡を拯濟したまふ
道俗時衆(七四)共に同心に
唯斯高僧の說を信ず可しと

註釋

【一】正信、眞正の信心、即ち心に彌陀佛の願力を如實に信ずるを云ふ。【二】念佛、阿彌陀佛の名號を稱念するを云ふ。偈は梵語ゲダ、頌(じゅ)と漢譯す、ほめたゝふることなり。【三】無量壽、阿彌陀の譯語、生滅を超えたる無限の壽命。【四】如來は諸佛の通稱にして眞如より來現するの義。【五】歸命、梵語南無の譯語、全生命を投げ出してまかせる意、本願招喚の勅命(親鸞)。【六】不可思議光とは、彌陀の光明は衆生の煩惱を昭破して往生成佛せしむる功德は人の得て知る可からざるを以て云ふ。

【七】法藏菩薩は、阿彌陀佛がもと菩薩たりし時の名、法藏は佛法藏とも如來藏とも云ふ、法性の理を云ふ、法性無量の性德を含藏するの意、菩薩とは佛たらんことを志求して修行を勵む者を云ふ。無量壽經(以下畧して大經と云ふ)によれば彌陀は曾て國王なりしが發心出家して沙門となり號して法藏と云ひ、世自在王佛の所に於て四十八願を建て、兆載永劫の修行を成し遂げて現に阿彌陀佛となり、現に西方淨土に在して衆生を敎化し說法中である。【八】因位、果位に對す、佛となるべき修養時期を云ふ。【九】諸佛が淨土を建設したる原因となつた行爲の優劣。【一〇】淨土の國土と、其中に在る人天の善惡、人天、佛敎にては迷の衆生が業因によつて趣き住む處を六に別つ、人天とは其の中の人間と天上なり、天上とは身に光明を具し、自然に快樂を受くべき衆生なり。【一一】視見とは

智眼を以て分明に觀察するを云ふ。

【一二】此の二句は凡夫衆生をして其性質の賢愚善惡に拘らず皆悉く之れを攝して齊しく大涅槃平等の妙果に至らしむる無上殊勝の願を立て希有の大弘誓を爲されたりと云ふなり。【一三】五劫、永い間と云ふ意。【一四】攝受とは本願を選擇し了りたるを云ふ。【一五】重誓は四十八願を說き畢り其要を取つて三種の誓を建てしこと、大經を見よ。【一六】阿彌陀佛が衆生を容易に攝化するの名聲なり、大經に「我佛道を成ずるに至らば、名聲十方に超えん、究竟して聞ゆる所聲くば、誓つて正覺を成ぜじ」とあり。

【一七】無量光、過去、現在、未來を貫きて無限に照す光。【一八】無邊光、空間的に無限に照す光。【一九】無礙光、如何なる罪障もさへぎること能はざる光。【二〇】無對光、如何なる光も比對し能はざる光。【二一】炎王光、光の中最も尊き光。【二二】清淨光、衆生の貪慾を治して清淨ならしむる光。【二三】歡喜光、衆生の瞋恚を治して歡喜を生ぜしむる光。【二四】智慧光、衆生の愚癡を治して智明を生ぜしむる光。【二五】不斷光、常恒不斷に衆生の心性を照す光。【二六】難思光、衆生を無造作に往生せしむる光。【二七】無稱光、往生の者をして直に成佛せしむる光。【二八】超日月光、日月等の物理的光を超えたる光。【二九】塵刹、無數の國土、又微塵の中に國土あり、塵中毛端皆刹あり佛あり、法を說き生を利す(華嚴經)。

【三〇】本願、「設ひ我佛を得んに、十方の衆生、至心に信樂して、我國に生ぜんと欲し、乃至十念せん、若し生れずば生覺を取らじ、唯五逆と正法を誹謗せんとせば除かん」、これ

第十八願なり、親鸞聖人は四十八願中唯第十八願に限り本願とせらる。【三一】名號、本願や名號、名號や本願(親鸞)信心獲得すと云ふは第十八の願をこゝろうるなり、この願のこゝろうるといふは、南無阿彌陀佛のすがたをこゝろうるなり(蓮如)。【三二】正定業、衆生の往生が正しく定まりたる行爲自体。【三三】至心、眞實信心いたりなば(和讃)。【三四】信樂、おほきに所聞(名號正定業の道理)を慶喜せん(和讃)。【三五】爲因、往生成佛の因となす。【三六】等覺、佛の正覺に等しからんとす、彌勒菩薩と同位。【三七】大涅槃は梵語滅度と譯す、煩惱の苦を滅して生死の流を度る。【三八】第十一願「設ひ、我佛を得んに、國中の人天、定聚に住し、必ず滅度に至らずば、正覺を取らじ」。

【三九】五濁とは劫濁(災難しきりに至る)見濁(邪見熾盛)煩惱濁(風紀紊亂)命濁(壽命短縮)を云ふ。【四〇】逆謗、五逆謗法の者。【四一】無明、佛智に對して明了ならざる心、こゝにては疑惑。【四二】横超、横とは煩惱を斷ずるを要せずして而も菩提を得るを云ひ、超とは凡夫より直に佛果に超到するを云ふ、即ち頓證なり。【四三】天上、人間、地獄、餓鬼、畜生皆惡業を免れず。【四四】勝解、勝れたる智慧。【四五】芬陀利華、白色の蓮華、淨潔無染の象徵。

【四六】印度西天之論家、龍樹天親の二大士、龍樹に十住論、天親に淨土論あり。【四七】中夏は支那にして曇鸞、導綽、善導の三高僧、日域は日本にして源信、源空の二高僧を指す

2 有無見、衆生の身心は今世のみで斷滅するとの見解、及び常住不斷に存在するとの見

解。【四八】歓喜地、諸佛の大法を證見し心に歓喜を生ずる菩薩の五十二位中の第四十一の證位。

【四九】修多羅經、こゝにては淨土三部經、即ち無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經を指す。

【五〇】光闡、廣く述ぶる蓮華藏世界、華嚴經に謂ふ所の淨土なり、衆生の煩惱を淨めたる蓮花の泥にそまざるに喩ふる也。【五一】眞如法性、前述大涅槃と同じ。【五二】應化、機宜に應じて化現する身を應化身と云ふ。

【五三】常向云々、梁の武帝が曇鸞和尚の居處に向つて菩薩の禮をなしたりと云ふなり。

【五四】三藏云々、三藏が曇鸞に淨土教を授けたので、曇鸞は仙經を燒いて歸依したりと云ふ意。【五五】論、天親菩薩の著した淨土論。【五六】報土云々、報土とは因位の願行に報いて成就せられたる淨土へ往生することは嘗願の他力によることを顯した。【五七】往還廻向、往相回向、還相回向の略、淨土に往生し還つて衆生を救ふの兩相。【五八】諸有、あらゆる迷の世界にゐる。

【五九】聖道、道綽は佛教を聖道門、淨土門の二に分類す、聖道は自力を宗とす。【六〇】三不一者信心あつからず若存若亡するゆへに二者信心一ならず、決定なきゆへなれば三者信心相續せず、餘念間故とのべたまふ（和讃）。【六一】三信、淳心、一心、相續心、【六二】像末法滅、釋迦滅後の佛法の盛衰を時期により分つ、滅後五百年間正法時代、次の一千年間は正法の影像のみ存する時代、即佛法時代、次の一萬年は教ありて修證者なき時代に

て末法時代、此の次の時代は法を全く滅し去る、即ち滅法時代と云ひ、これ等の各時代が更に繰返さるゝと云ふなり。【六三】悲引慈悲を以て導く。

【六四】定散、「定は即ち慮を息め、以て心を凝らす。散は即ち惡を廢し以て善を修む」（觀經疏）、定善散善共に自力として排するなり。【六五】矜哀、あはれむ。【六六】光明云々、光明と名號が信心の因緣となる。【六七】金剛心、自ら破れず他を破る、固きことダイヤモンドの如き心、こゝにては堅き信心を指す。【六八】韋提、摩竭陀の王后、事は觀無量壽經に出づ。

【六九】三忍、喜忍、悟忍、信忍「喜忍と云ふは、これ信心歓喜の得益をあらはす心なり、悟忍と云ふは佛智をさとる心なり、信忍といふは、すなはちこれ信心成就のすがたなり、（蓮如）。

【七〇】專雜執心、專修執心、念佛の一業を修むるの執心、雜修執心、雜多の行を修むるの執心。【七一】報化二土、極樂は彌陀別願の報土にして、たゞ他力信心の者、之に入ることを許す、自力雜行の者は、其の報土中に於て佛方便力を以て化現せし假相の土（化土）に止むると云ふなり。

【七二】片州、片よれる日本。【七三】決するに云々、疑情にひつかゝるから生死の家に歸るのだ。【七四】時衆、各時代の社會の人々。

正信念佛偈

親鸞上人御製

歸命無量壽如來
南無不可思議光

法藏菩薩因位時
在世自在王佛所
覩見諸佛淨土因
國土人天之善惡
建立無上殊勝願
超發希有大弘誓
五劫思惟之攝受

大御命かぎりなき御佛に歸し
その靈しき御光に憑り奉る。

佛、もと法藏の御名を持ち
饒王佛の御もとにて
さはの淨土の御もとゐと
其よしあしとをみそなはし
こよなくたかき御ねがひと
まれの御ちかひたてまして
劫波、いつたび廻るあひだ
おもひえらばせたまひにき。

釋鼎謹譯

重誓名聲聞十方
普放無量無邊光
無礙無對光炎王
清淨歡喜智慧光
不斷難思無稱光
超日月光照塵刹
一切群生蒙光照

かさねてちかひたまふらく
わが、いま、しめす阿彌陀の名
もし十方に、きこえずば
ゆめ、正覺に、のぼらじと。

普く、無量、無邊の光
無礙、無對、炎王の光
清淨、歡喜、智慧の光
不斷、難思、無稱の光
超日月の御光を
はなちたまひて、なべて世を
てらしたまへば、ありとある
ものみなめぐみ、うけまつる

本願名號正定業
至心信樂願爲因
成等覺證大涅槃
必至滅度願成就

如來所以興出世
唯說彌陀本願海
五濁惡時群生海
應信如來如實言

この御ねがひの御名こそは
正しきさだめのちからなれ。
こをうけしめん御願ひぞ
まさにすくひのもとゐなる。

われらさとりにちかづきて
つひに涅槃に、うまるゝは
かならずこゝにむかへんの
みちかひすでに成ればなり。

この御ねがひをとかんとて
釋迦牟尼、此世に出ましぬ。
にごりのうみになやむ子よ
まことのみことうけよかし

能發一念喜愛心
不斷煩惱得涅槃
凡聖逆謗齊廻入
如衆水入海一味
攝取心光常照護
已能雖破無明闇
貪愛瞋憎之雲霧
常覆眞實信心天
譬如日光覆雲霧
雲霧之下明無闇
獲信見敬大慶喜
即横超截五惡趣
一切善惡凡夫人
聞信如來弘誓願

このまこと、一たびうけば
つみのまゝ、涅槃にいらむ
もゝのみづ、海に入るごと
凡聖みな、めぐみにとけむ。

光、つねに、護りたまへば
雲に似て、つみは覆へど
まことの日、つゆ障られで
むねの上、闇とはに消ゆ。

このまこと、えて喜ばゞ
惡き道、とくたちこえむ。
おしなべて、こを御佛の
ひとの世の、智慧ある者よ

佛言廣大勝解者
是人名芬陀利華

彌陀佛本願念佛
邪見憍慢惡衆生
信樂受持甚以難
難中之難無過斯

印度西天之論家
中夏日域之高僧
顯大聖興世正意
明如來本誓應機

ひぢにほふ白き花よと
ほめますぞ、いと畏きや。

されどほとけのみちかひは
よこしま、おごりに蔽はるゝ
人のうくるは、やすからで
かたきがなかにいとかたし。

西のそら、印度の國
東、支那、ひのもとに
このみちの、われひとに
ふさへるを、宣らんため
みひじりの、みこゝろの
こゝなるを、つげむため

釋迦如來楞伽山
爲衆告命南天竺
龍樹大士出於世
悉能摧破有無見
宣說大乘無上法
證歡喜地生安樂

顯示難行陸路苦
信樂易行水道樂
憶念彌陀佛本願

つぎつぎに、論家いで
世々、聖、あれましぬ。

釋迦牟尼如來、御弟子等に
楞伽の會にて、宣りたまふ
のちのよ、南に龍樹いで
まよひをやぶり、法をとき
歡喜のくらゐ、さとりえて
やすき御國にうまれむと。
この御ことばにこたへつゝ
菩薩龍樹、いでましぬ。
かたきくがぢをあゆまざれ
やすきふなぢにむかふべし
佛の御ねがひ、念ずれば

自然即時入必定
唯能常稱如來號
應報大悲弘誓恩

天親菩薩造論說
歸命無礙光如來
依修多羅顯眞實
光闡横超大誓願
廣由本願力回向
爲度群生彰一心
歸入功德大寶海
必獲入大會衆數
得至蓮華藏世界
即證眞如法性身

すなはち、心、さだまらむめぐみ、おもひて、常にたゞ御名をよべとぞつげたまふ。

天親、御ふみをときたまひみづから佛にしたがひて御名のまことをのべたまひちかひの旨を、うちひらきめぐみによりて、一心のみちを世のためあらはして功德の海に歸しぬればかならず聖のかずにいらむ華のみくにゝいたりなばすなはちまことをさとりえて

遊煩惱林現神通
入生死園示應化

本師曇鸞梁天子
常向鸞處菩薩禮
三藏流支授淨教
焚燒仙經歸樂邦
天親菩薩論註解
報土因果願誓願
往還回向由他力
正定之因唯信心
惑染凡夫信心發
證知生死即涅槃
必至無量光明土

まよひのはやし、つみの園みぐみしかむとゝきたまふ。

曇鸞、流支にみちびかれ仙經、やきて、道にいり梁王、菩薩とうやまひてつねにみもとををろがみぬ。天親菩薩のふみをときちかひに淨土のみちをさしゆくもかへるも御ちからぞすくひのたねは信のみぞつみひと、信をおこしなば迷に涅槃の理をさとり御くにに生れてありとある

諸有衆生皆普化
道綽決聖道難證
唯明淨土可通入
萬善自力貶勤修
圓滿德號勸專稱
三不三信誨慇懃
像末法滅同悲引
一生造惡値弘誓
至安養界證妙果

衆生化せむと宣べたまふ。

道綽、つひに、聖道のさとりがたきをさしおきてひとり淨土のかどのみぞかよひ得べきとうちさだめ自力の諸善を、おとしめて御名となへよとすゝめましまし三信のをしへ、ねむごろに道なき世をも、あはれみて一生、つみにけがれしもひとたび誓に、あひぬればみくにゝ入りて、たへの法さとり得んとぞ教へます。

善導獨明佛正意
矜哀定散與逆惡
光明名號顯因緣
開入本願大智海
行者正受金剛心
慶喜一念相應後
與韋提等獲三忍
即證法性之常樂

異見、くさぐさおこれるに善導、ひとり御ほとけのみこゝろ明かし、すべて世のよきとあしきを憐みて光のえにし、御名のたねふたつの御手にみちびかれ願のうみに、いりぬればまさに金剛の信をえむ一念、御名にかなふとき韋提と同じく、よろこびとさとりと信との三つをえてさかえつきじと宣りたまふ。

源信廣開一代教

源信、ひろく御ひじりの

偏歸安養勸一切
專雜執心判淺深
報化二土正辨立
極重惡人唯稱佛
我亦在彼攝取中
煩惱障眼雖不見
大悲無倦常照我
本師源空明佛敎
憐愍善惡凡夫人
眞宗敎證興片州

御をしへ開き、みづからも
ひとへに淨土にむかひつゝ
あまねく世にもろちすゝめ
あさきおもひにみだれざれ
懈慢のしろにとゞまらむ
ふかきこゝろをたもたばや
まことのくにゝいたるべし
たゞ御名をよべ、罪びとよ
つみのくもりにみえねども
みおやはうまずたえまなく
われをてらすとさとします。
我が師源空、御をしへを
きはめつ、世をば憐みて
まことのみちを、この國の

選擇本願弘惡世
還來生死輪轉家
決以疑情爲所止
速入寂靜無爲樂
必以信心爲能入
弘經大士宗師等
拯濟無邊極濁惡
道俗時衆共同心
唯可信斯高僧說

民の上、たかく宣りまして
なやみの家に、さまよふは
たゞ疑の、あればなり
しづけき無爲のみやこには
信のみ入ると、のべたまふ。
御經つたふる御ひじり等
世々につゞきて、人の世の
はてなきつみにくるしめる
まよひの子らをよびたまふ。
家をいでたると、家なると
このよのひとよ、諸ともに
おなじこゝろにつゝしみて
たゞこのみこと、信ぜばや。

歎異抄

竊ニ廻ニ愚案一、粗勘ニ古今一、歎レ異ニ先師口傳之眞信一、思レ有ニ後學相續之疑惑一、幸不レ依ニ有緣知識一者、爭得レ入ニ易行一門一哉。全以ニ自見之覺悟一、莫レ亂ニ他力之宗旨一。仍故親鸞聖人御物語之趣、所レ留ニ耳底一、聊註レ之、偏爲レ散ニ同心行者之不審一也、云々。

「先師」親鸞を云ふ

「有緣智識」因緣深き教師の意にて親鸞のこと

一　彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まうさんとおもひたつこころのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。彌陀の本願には、老少善惡のひとをえらばれず、たゞ信心を要とすとしるべし。そのゆへは、罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてましまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆへに。惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへにと、云々。

此章は名號が一切衆生の根機を選ばず救ふことを說く

「攝取不捨」『觀無量壽經』に說く「光明遍く十方世界を照らし、念佛の衆生を攝取（をさめとり）して捨てず」と

「煩惱」理智に關しては謬誤、情意に關しては當爲に反くこと等、惡の心作用を云ふ

一　をの〳〵十餘箇國のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御こゝろざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり。しかるに、念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こゝろにくゝおぼしめしておはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。もししからば、南

此章は宗義は親鸞の私見に非ざるを說く

「十餘ケ國」かつて關東に在りしなり敎化を蒙りたる門弟はるゝ〳〵師親鸞を京都に尋ねたるなり。古人、常陸を起點として下總・武藏・相模・伊豆・駿河・遠江・三河・尾張・伊勢・近江・山城の十二個國を數ふ

「こゝろにくゝ」奧床しく

都北嶺にも、ゆゝしき學生たち、おほく座せられてさふらふなれば、かのひとゞにもあひたてまつりて、往生の要よく〳〵きかるべきなり。親鸞にをきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念佛は、まことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆへは、自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄にもおちてさふらはゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もを

「南都北嶺」奈良にては興福・東大等の諸寺、比叡にては延暦・三井兩寺を指す
「ゆゝしき」容易ならぬ
「學生」學匠とも書く、主として天台學僧を云ふ
「よきひと」源空(法然)聖人を指す
「かぶりて」かうぶりての音便

よびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の說教、虛言なるべからず。佛說まことにおはしまさば、善導の御釋、虛言したまふべからず。善導の御釋まことならば、法然のおほせそらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむね、またもてむなしかるべからずさふらふ歟。詮ずるところ愚身の信心にをきては、かくのごとし。このうへは、念佛をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなりと、云々。

三 一 善人なをもて往生をとぐ、いはんや惡人をや。しかるを世のひとつねにいはく、惡人なを往生す、いかにいはんや善人をやと。この條、一旦そのい

「善導」淨土敎を大成せる支那唐代の高僧、日本淨土敎は主としてこの流を汲めるもの、特に法然は敬慕して偏依善導一師といひ、親鸞また淨土眞宗の七祖の一に數ふ

此章は往生敎の對機は惡人なることゝ、其の根據は他力なることを說く

はれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこゝろかけたるあひだ、彌陀の本願にあらず。しかれども、自力のこゝろをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、眞實報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて、願ををこしたまふ本意、惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人、もとも往生の正因なり。よて善人だにこそ往生すれ、まして惡人はと、おほせさふらひき。

「眞實報土」眞實の本願に報はれたる淨土、方便化土と區別す

一四　慈悲に聖道・淨土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。また淨土の慈悲といふは、念佛して、いそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生に、いかにいとをし、不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念佛まうすのみぞ、すえとをりたる大慈悲心にてさふらふべきと、云々

此章念佛の勝德は聖道一代の慈悲に勝れて永遠の慈悲なることを說く

「聖道・淨土」佛道に於て、この穢土にて成佛を期するを聖道門といひ、かの淨土に於てするを淨土門といふ

一五　親鸞は、父母の孝養のためとて、一返にても念佛まうしたること、いまださふらはず。そのゆへは、一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。いづれもいづれも、この順次生に佛になりてたすけさふらふべきなり。わがちからにてはげむ善にてもさふらはばこそ、念佛を廻向して父母をもたすけさふらはめ。たゞ自力をすてて、いそ

此章は他力信心の不廻向を說く

「順次生」次の生、現在の生の直後なる次の生をいふ

き浄土のさとりをひらきなば、六道・四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通法便をもて、まづ有縁を度すべきなりと、云々。

一六　専修念佛のともがらの、わが弟子、ひとの弟子といふ相論のさふらふらんこと、もてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人もたずさふらふ。そのゆへは、わがはからひにて、ひとに念佛をまうさせさふらはばこそ、弟子にてもさふらはめ、ひとへに彌陀の御もよほしにあづかて念佛まうしさふらふひとを、わが弟子とまうすこと、きはめたる荒涼のことなり。つくべき縁あればともなひ、はなるべき縁あれば、はなるゝことのあるをも、師をそむきて、ひとにつれて念佛すれば、往生すべからざるものなりなんといふこと、不可説なり。

「六道・四生」六道は地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六種の境界、四生は胎生・卵生・湿生・化生の四類の有情の意、なべて流轉輪廻の生存

「神通方便」無礙自在なる衆生救済のはたらき

此章は人に基く教團を否認す

「あづかて」あづかりての音便

「荒涼のこと」すさまじい不遠慮な言分

如来よりたまはりたる信心を、わがものがほにとりかへさんとまうすにや、かへすがへすもあるべからざることなり。自然のことはりにあひかなはば、佛恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと、云々。

一七　念佛者は無礙の一道なり。そのいはれいかんとならば、信心の行者には天神・地祇も敬伏し、魔界・外道も障礙することなし。罪悪も業報を感ずることあたはず、諸善もをよぶことなきゆへに無礙の一道なりと、云々。

一八　念佛は行者のために非行・非善なり。わがはからひにて行ずるにあらざれば、非行といふ。わがはからひにてつくる善にもあらざれば、非善といふ。ひとへに他力にして、自力をはなれたる

「自然のことはり」おのづから然らしめらるゝ本願の御もよほし

此章は念佛は諸善を超ゆる德なることを説く

「天神・地祇」天の神、地の神

「魔界・外道」魔界は冥界にて佛法の礙げをなすもの、外道は佛教以外の道で、これも佛法を妨ぐるもの

此章は念佛行は他力自然なることを説く

ゆへに、行者のためには非行・非善なりと、云々。

一九　念佛まうしさふらへども、踊躍歡喜のこゝろ、をろそかにさふらふこと、またいそぎ浄土へまいりたきこころのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにてさふらふやらんと、まうしいれてさふらひしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯圓房おなじこゝろにてありけり。よく〳〵案じみれば、天におどり、地におどるほどに、よろこぶべきことをよろこばぬにて、いよ〳〵往生は一定とおもひたまふべきなり。よろこぶべきこゝろをさへて、よろこばせざるは煩惱の所爲なり。しかるに佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよ

*此章は割陀の願意は劣惡の衆生の爲めなるを說く

「をろそか」餘り注意が向けられぬ、たいしてうれしいと云ふことがない

〳〵たのもしくおぼゆるなり　また浄土へいそぎまいりたきこゝろのなくて、いさゝか所勞のこともあれば、死なんずるやらんとこゝろぼそくおぼゆることも、煩惱の所爲なり、久遠劫よりいまで流轉せる苦惱の舊里はすてがたく、いまだむまれざる安養の浄土はこひしからずさふらふこと、まことによく〳〵煩惱の興盛にさふらふにこそ。なごりおしくおもへども、娑婆の緣つきて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはいるべきなり。いそぎまいりたきこゝろなきものを、ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよ〳〵大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じさふらへ。踊躍歡喜のこゝろもあり、いそぎ浄土へもまいりたくさふらはんには、煩惱のなきやらん

「所勞」病氣

「劫」長時を表す梵語の音譯

「流轉」善惡因果の支配による苦惱の生存の連鎖

「安養」心身を安らかにはぐくむ意で、浄土の異名

と、あやしくさふらひなましと、云々。

一十　念佛には、無義をもて義とす。不可稱・不可說・不可思議のゆへにと、おほせさふらひき。

そも〳〵かの御在生のむかし、おなじこゝろざしにして、あゆみを遼遠の洛陽にはげまし、信をひとつにして、心を當來の報土にかけしともがらは、同時に御意趣をうけたまはりしかども、そのひと〳〵にともなひて念佛まうさるゝ老若、そのかずをしらずおはしますなかに、上人のおほせにあらざる異義どもを、近來はおほせられあふてさふらふよし、つたへうけたまはる。いはれなき條〳〵の子細のこと。

一十一　一文不通のともがらの念佛まうすにあふて、なんぢは誓願不思議を信じて念佛まうすか、

此章は念佛は無義を以て義となす旨を說く

「御在生」假名本、永正本「在生」

「遼遠の洛陽」關東より京都をさしていふ（第二章參照）

「當來」未來の意

以上の十章は親鸞の直說を擧げ、此章以下は親鸞滅後の異義を揭げて破邪即正す、此章は誓願名號別見の爭を破す

また名號不思議を信ずるかと、いひおどろかして、ふたつの不思議の子細をも分明にいひひらかずして、ひとのこゝろをまどはすこと、この條かへすがへもこゝろをとゞめて、おもひわくべきことなり。誓願の不思議によりて、やすくたもち、となへやすき名號を案じいだしたまひて、この名字をとなへんものを、むかへとらんと御約束あることなれば、まづ彌陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて、生死をいづべしと信じて、念佛のまうさるゝも、如來の御はからひなりとおもへば、すこしもみづからのはからひまじはらざるがゆへに、本願に相應して實報土に往生するなり。これは誓願の不思議をむねと信じたてまつれば、名號の不思議も具足して、誓願名號の不思議ひとつに

「實報土」眞實報土の略

して、さらにことなることなきなり。つぎにみづからのはからひをさしはさみて、善惡のふたつにつきて、往生のたすけさはり、二樣におもふは、誓願の不思議をばたのまずして、わがこゝろに往生の業をはげみて、まうすところの念佛をも、自行になすなり。このひとは名號の不思議をもまた信ぜざるなり。信ぜざれども邊地・懈慢・疑城・胎宮にも往生して、果遂の願のゆへにつゐに報土に生ずるは、名號不思議のちからなり。これすなはち誓願不思議のゆへなれば、たゞひとつなるべし。

十二　一　經釋をよみ學せざるともがら、往生不定のよしのこと、この條すこぶる不足言の義といひつべし。他力眞實のむねをあかせるもろ〳〵の聖

「自行」自己の行

「邊地・懈慢・疑城・胎宮」いづれも自力の行者の生るゝ方便化土をいふ、邊地とは淨土の片端、懈慢は執心の牢固たらざるもの、疑城は疑ひの城、胎宮は華に意につゝまれて生れたる宮殿の善惡に拘泥して、それらは總べて疑ひの境地を超えたる眞宗教の境地を知らざるを意味す

「果遂の願」念佛しながら自力の心を離れざる衆生をして大悲の願心に轉入せしめんとの願の意、『大經』に出づる第二十八願の意

此章は他力易行の宗旨を明にして無智者の宗教を力說す

教は、本願を信じ念佛をまうさば佛になる、そのほか〳〵なにの學問かは往生の要なるべきや。まことにこのことはりにまよへらんひとは、いかにも〳〵學問して、本願のむねをしるべきなり。經釋をよみ學すといへども、聖教の本意をこゝろえざる條、もとも不便のことなり。一文不通にして經釋のゆくぢもしらざらんひとの、となへやすからんための名號におはしますゆへに、易行といふ。學問をむねとするは聖道門なり。難行となづく。あやまて學問して名聞利養のおもひに住するひと、順次の往生いかゞあらんずらんといふ證文もさふらふぞかし。當時、專修念佛のひとと聖道門のひと、法論をくはだてて、わが宗こそすぐれたれ、ひとの宗はをとりなりといふほどに、法敵も

「ゆくぢ」行く路、筋道のこと

「利養」名利供養

いできたり謗法もをこる。これしかしながら、みづからわが法を破謗するにあらずや。たとひ諸門こぞりて、念佛はかひなきひとのためなり、その宗あさしいやしといふとも、さらにあらそはずして、われらがごとく、下根の凡夫、一文不通のものの、信ずればたすかるよし、うけたまはりて信じさふらへば、さらに上根のひとのためにはいやしくとも、われらがためには最上の法にてましますゝ、たとひ自餘の教法はすぐれたりとも、みづからがためには、器量をよばざればつとめがたし、われもひとも生死をはなれんことこそ、諸佛の御本意にておはしませば、御さまたげあるべからずとて、にくひ氣せずば、たれのひとかありてあだをなすべきや。かつは評論のところには、もろ〳〵

「にくひ氣」憎い氣

の煩惱をこる、智者遠離すべきよしの證文さふらふにこそ。故聖人のおほせには、この法をば信ずる衆生もあり、そしる衆生もあるべしと、佛ときおかせたまひたることなれば、我れはすでに信じたてまつる、また、ひとありてそしるにて、佛説まことなりけりと、しられさふらふ。しかれば往生はいよ〳〵一定とおもひたまふべきなり。あやまてそしるひとのさふらはざらんにこそ、いかに信ずるひとはあれども、そしるひとのなきやらんともおぼえさふらひぬべけれ。かくまうせばとて、かならずひとにそしられんとにはあらず、佛のかねて信謗ともにあるべきむねをしろしめして、ひとのうたがひをあらせじと、ときをかせたまふことをまうすなりとこそさふらひしか。いまの世に

「あやまて云々」偶々他力信心を非難する者がなかつた場合はこんなに信じてるのになぜ非難者がないのかと寧ろ考ふべきだ

は學文してひとのそしりをやめ、ひとへに論義問答むねとせんと、かまへられさふらふにや。學問せば、いよ〳〵如來の御本意をしり、悲願の廣大のむねをも存知して、いやしからん身にて往生はいかがなんどとあやぶまんひとにも、本願には善惡淨穢なきをもむきをも、とききかせられさふらはばこそ、學生のかひにてもさふらはめ。たま〳〵なにごころもなく、本願に相應して念佛するひとをも、學文してこそなんどといひをどさるゝこと、法の魔障なり、佛の怨敵なり。みづから他力の信心かぐるのみならず、あやまて他をまよはさんとす。つゝしんでおそるべし、先師の御こころにそむくことを。かねてあはれむべし、彌陀の本願にあらざることをと、云々。

「悲願」大悲の本願

「いひをどす」言ひ威す

「先師」親鸞

十三

一　彌陀の本願不思議におはしませばとて、惡ををそれざるは、また本願ぼこりとて、往生かなふべからずといふこと、この條本願をうたがふ、善惡の宿業をこゝろえざるなり。よきこゝろのをこるも、宿善のもよほすゆへなり。惡事のおもはれせらるゝも、惡業のはからふゆへなり。故聖人のおほせには、兎毛羊毛のさきにいるちりばかりも、つくるつみの、宿業にあらずといふことなしとしるべしとさふらひき。またあるとき、唯圓房はわがいふことをば信ずるかとおほせのさふらひしかば、さひだ、さんさふらふとまうしさふらひしかば、さらばいはんこと、たがふまじきかと、かさねておほせのさふらひしあひだ、つゝしんで領狀まうしてさふらひしかば、たとへばひとを千人

此章は親鸞の宗教は罪多き在家者の宗教なることを說く

「領狀」普通領承と書く、承知すること

ころしてんや、しからば往生は一定すべしとおほせさふらひしとき、おほせにてはさふらへども、一人もこの身の器量にては、ころしつべしともおぼへずさふらふと、まうしてさふらひしかば、さてはいかに親鸞がいふことを、たがふまじきとはいふぞと。これにてしるべし、なにごとも、こゝろにまかせたることならば、往生のために千人ころせといはんに、すなはちころすべし。しかれども一人にてもかなひぬべき業縁なきによりて害せざるなり。わがこゝろのよくてころさぬにはあらず。また害せじとおもふとも、百人千人をころすこともあるべしと、おほせのさうらひしは、われらがこゝろのよきをばよしとおもひ、あしきことをばあしとおもひて願の不思議にてたすけたまふ

といふことを、しらざることをおほせのさふらひしなり。そのかみ邪見におちたるひとあて、悪をつくりたるものをたすけんといふ願にてましませばとて、わざとこのみて悪をつくりて、往生の業とすべきよしをいひて、やう〳〵にあしざまなることのきこゑさふらひしとき、御消息に、くすりあればとて毒をこのむべからずとあそばされてさふらふは、かの邪執をやめんがためなり。またく悪は往生のさはりたるべしとにあらず。持戒持律にてのみ本願を信ずべくば、われらいかでか生死をはなるべきや。かゝるあさましき身も、本願にあひたてまつりてこそ、げにほこられさふらへ。さればとて身にそなへざらん悪業は、よもつくられさふらはじものを。また、うみかわに、あみをひ

「あて」ありての音便

「御消息」親鸞の書翰法語を收錄せる『末燈鈔』（第十九通）に見ゆ

「くすりあればとて」藥になるからとて

「持戒持律」戒律を持つこと

「ほこられ」誇り得る

き、つりをして、世をわたるものも、野やまに、しゝをかり、とりをとりて、いのちをつぐともがらも、あきなひをもし、田畠をつくりてすぐるひとも、たゞおなじことなり。さるべき業縁のもよほせば、いかなるふるまひもすべしとこそ、聖人はおほせさふらひしに、當時は後世者ぶりして、よからんものばかり念佛まうすべきやうに、あるひは道場にはりぶみをして、なむ〳〵のことしたらんものをば、道場へいるべからずなんどといふこと、ひとへに賢善精進の相をほかにしめして、うちには虛假をいだけるものか。願にほこりてつくらんつみも、宿業のもよほすゆへなり。されば、よきこともあしきことも、業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまいらすればこそ、他力に

「後世者ぶり」念佛者と自負すること、後生ねがひぶりの意

「なむ〳〵」何々

てはさふらへ。唯信抄にも、彌陀いかばかりのちからましますとしりてか、罪業の身なれば、すくはれがたしとおもふべきとさふらふぞかし。本願にほこるこゝろのあらんにつけてこそ、他力をたのむ信心も決定しぬべきことにてさふらへ。おほよそ惡業煩惱を斷じつくしてのち本願を信ぜんのみぞ、願にほこるおもひもなくてよかるべきに、煩惱を斷じなば、すなはち佛になり、佛のためには、五劫思惟の願、その詮なくやましまさん。本願ぼこりといましめらるゝひと〴〵も、煩惱不淨具足せられてこそさふらふげなれ、それは願にほこらるゝにあらずや。いかなる惡を本願ぼこりといふ、いかなる惡かほこらぬにてさふらふべきぞや。かへりてこゝろをさなきことか。

「唯信抄」法然門下の聖覺法印の著、親鸞は常に門弟達にこの書をすゝめ、自らも彼等のためにこれを註釋して『唯信鈔文意』を作つてゐる

「五劫思惟」彌陀の本願は五劫に思惟されたることは『大經』に出づ

「こゝろをさなき」心幼き

一念に八十億劫の重罪を滅すと信ずべしといふこと、この條は、十悪・五逆の罪人、日ごろ念佛をまうさずして、命終のときはじめて善知識のをしへにて、一念まうせば、八十億劫のつみを滅し、十念まうせば、十八十億劫の重罪を滅して往生すといへり。これは十悪五逆の輕重をしらせんがために、一念十念といへるか。滅罪の利益なり、いまだわれらが信ずるところにをよばず。そのゆへは彌陀の光明にてらされまいらするゆへに、一念發起するとき、金剛の信心をたまはりぬれば、すでに定聚のくらゐにおさめしめたまひて、命終すればもろ〳〵の煩惱惡障を轉じて、無生忍をさとらしめたまふなり。この悲願ましまさずば、かゝるあさましき罪人、いかでか生死を解

此章は觀經下々品の一稱の稱名は八十億劫の罪を滅すと云ふ文を根據として自力念佛を勸むる異議を破す

「十悪」殺生・偸盗・邪淫・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪欲・瞋恚・邪見

「五逆」殺父・殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出佛身血

「定聚のくらゐ」正定聚の位の略、必ず佛になるべき身とさだまれる位

「無生忍」法性の無生なるを認知することに依て心不動なるをいふ

脫すべきとおもひて、一生のあひだまうすところの念佛は、みなこと〴〵く如來大悲の恩を報じ、德を謝すとおもふべきなり。念佛まうさんごとに、つみをほろぼさんと信ぜんは、すでにわれとつみをけして、往生せんとはげむにてこそさふらふなれ。もししからば、一生のあひだ、おもひとおもふこと、みな生死のきづなにあらざることなければ、いのちつきんまで念佛退轉せずして往生すべし。たゞし業報かぎりあることなれば、いかなる不思議のことにもあひ、また病惱苦痛をせめて、正念に住せずしてをはらんに、念佛まうすことかたし。そのあひだのつみは、いかゞして滅すべきや。つみきえざれば往生はかなふべからざるか。攝取不捨の願をたのみたてまつらば、いかなる不

「不思議のこと」不慮の出來事

「チハランニ」法要本、永正本「チハラン」

思議ありて罪業をおかし、念佛まうさずしてをはるとも、すみやかに往生をとぐべし。また念佛のまうされんも、たゞいまさとりをひらかんずる期のちかづくにしたがひても、いよ〳〵彌陀をたのみ、御恩を報じたてまつるにてこそさふらはめ。つみを滅せんとおもはんは自力のこゝろにして、臨終正念といのるひとの本意なれば、他力の信心なきにてさふらふなり。

一十五　煩惱具足の身をもて、すでにさとりをひらくといふこと、この條、もてのほかのことにさふらふ。即身成佛は眞言祕敎の本意、三密行業の證果なり。六根清淨はまた法華一乘の所說、四安樂の行の感德なり。これみな難行上根のつとめ、觀念成就のさとりなり。來生の開覺は、他力淨

「臨終正念」自力の行者は臨終に佛菩薩の來迎を待たずして往生するをえざる故、正念に住するを待ち望むをいふ此章は即身成佛の異議を破す

「三密行業」密敎の實踐法にして、三密とは身密・口密・意密の意、身に印契を結び口に眞言を誦し意に本尊を觀ずるをいふ。この衆生の三密の行を以て如來口意の三密と相應せんとする修法をいふ

土の宗旨、信心決定の道なるがゆへなり。これまた易行下根のつとめ、不簡善惡の法なり。おほよそ今生にをいては、煩惱惡障を斷ぜんこと、きはめてありがたきあひだ、眞言法華を行ずる淨侶、なをもて順次生のさとりをいのる。いかにいはんや、戒行慧解ともになしといへども、彌陀の願船に乘じて生死の苦海をわたり、報土のきしにつきぬるものならば、煩惱の黑雲はやくはれ、法性の覺月すみやかにあらはれて、盡十方の無礙の光明に一味にして、一切の衆生を利益せんときにこそ、さとりにてはさふらへ。この身をもて、さとりをひらくとさふらふなるひとは、釋尊のごとく種々の應化の身をも現じ、三十二相、八十隨形好をも具足して、說法利益さふらふにや。これをこそ今生

「六根清淨」『法華經』によるに、無量の功德を以て眼・耳・鼻・舌・身・意の六根の清淨なること、例へば肉眼清淨なるときは世界の一切の事象を見ることをうるが如きをいふ

「四安樂の行」身口意の善行を慈悲行とをいふ、この四行は皆な能く危きを離れ安きを得、遠く樂果を感ずる故に安行といふ。六根清淨はこの四安樂によつて得らるゝなり

「觀念」事理を觀察して正念に住すること、眞言ならば阿字觀、法華なれば一心三觀の如きこと

「來生の開覺」次の世にて覺を開くこと

「不簡善惡」彌陀の本願は善惡の人をえらばず（第一章參照）

「戒行慧解」戒律を身に行ひ、智慧を以て心に解を得ること

「應化の身」衆生に應同し示現する身

にさとりをひらく本とはまうしさふらへ。和讃にいはく、金剛堅固の信心の、さだまるときをまちえてぞ、彌陀の心光攝護して、ながく生死をへだてけるとはさふらへば、信心のさだまる時に、ひとたび攝取してすてたまはざれば、六道に輪廻すべからず。しかればながく生死をばへだてさふらふぞかし。かくのごとくしるを、さとるとはいひまぎらかすべきや。あはれにさふらふをや。浄土眞宗には、今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくと、ならひさふらふぞとこそ、故聖人のおほせにはさふらひしか。

一十六 信心の行者、自然にはらをもたて、あしざまなることをもおかし、同朋同侶にもあひて、口論をもしてはかならず廻心すべしといふこと、この條、斷惡修善のここちか。一向專修のひとにをいては、廻心といふこと、たゞひとたびあるべし。その廻心は、日ごろ本願他力眞宗をしらざるひと、彌陀の智慧をたまはりて、日ごろのこゝろにては、往生かなふべからずとおもひて、もとのこゝろをひきかへて、本願をたのみまいらするをこそ、廻心とはまうしさふらへ。一切の事に、あしたゆふべに廻心して、往生をとげさふらふべくば、ひとのいのちは、いづるいき、いるいきをまたずして、をはることなれば、廻心もせず、柔和忍辱のおもひにも住せざらんさきに、いのちつきば、攝取不捨の誓願はむなしくならせおはしますべきにや。くちには願力をたのみたてまつるといひて、こゝろには、さこそ惡人をたすけんといふ願不思議に

「三十二相、八十隨形好」佛身には三十二種の大丈夫の好き相具はれりといひ、八十隨形好とは更にそれに基づいて立てられた隨伴的な好相をいふ

「金剛堅固云々」親鸞の『高僧和讃』に出づ

「心光攝護」佛心の光が信心の行者を照し護るなり

此章は念佛に者して惡を犯す場合一度罪を廻身懺悔すれば消滅すべしとする異議を破す

ましますといふとも、さすが、よからんものをこそ、たすけたまはんずれとおもふほどに、願力をうたがひ、他力をたのみまいらすること〻ろかけて、邊地の生をうけんこと、もともなげきおもひたまふべきことなり。信心さだまりなば、往生は彌陀にはからはれまいらせてすることなれば、わがはからひなるべからず。わろからんにつけても、いよ〳〵願力をあをぎまいらせば、自然のことはりにて、柔和忍辱のこ〻ろもいでくべし。すべてよろづのことにつけて、往生には、かしこきおもひを具せずして、たゞほれ〳〵と彌陀の御恩の深重なること、つねにおもひいだしまいらすべし。しかれば念佛もまうされさふらふ。これ自然なり。わがはからはざるを、自然とまうすなり。これす

なはち他力にてまします。しかるを、自然といふことの別にあるやうに、われものしりがほにいふひとのさふらふよしうけたまはる、あさましくさふらふなり。

一、邊地の往生をとぐるひと、つねには地獄におつべしといふこと、この條、いづれの證文にみえさふらふぞや。學生たつるひとのなかにいひいださるゝことにてさふらふなるこそ、あさましくさふらへ。經論聖教をば、いかやうにみなされてさふらふやらん。信心かけたる行者は、本願をうたがふによりて、邊地に生じて、うたがひのつみをつぐのひてのち、報土のさとりをひらくとこそうけたまはりさふらへ。信心の行者すくなきゆへに、化土におほくすゝめられさふらふを、つね

此章は邊地の往生者も遂には地獄に墮つと云ふ說の典據が何處にあるかを追究す

「學生たつるひと」學生めかす人

にむなしくなるべしとさふらふなるこそ、如來に虚妄をまうしつけまいらせられさふらふなれ。

一、佛法のかたに施入物の多少にしたがひて、大小佛になるべしといふこと、この條、不可説なり。様々比興のことなり。まづ佛に大小の分量をさだめんことあるべからずさふらふ。かの安養淨土の教主の御身量をとかれてさふらふも、それは方便報身のかたちなり。法性のさとりをひらひて、長短方圓のかたちにもあらず、青黄赤白黒のいろをもはなれなば、なにをもてか大小をさだむべきや。念佛まうすに化佛をみたてまつるといふことのさふらふなるこそ、大念には大佛をみ、小念には小佛をみるといへるか。もしこのことはりなんどに、はしひきかけられさふらふやらん。かつはまた檀波羅密の行ともいひつべし。いかにたからものを佛前にもなげ、師匠にもほどこすとも、信心かけなばその詮なし。一紙半錢も佛法のかたにいれずとも、他力にこゝろをなげて、信心ふかくば、それこそ願の本意にてさふらはめ。すべて佛法にことをよせて、世間の欲心もあるゆへに、同朋をいひをどさるゝにや。

右條々は、みなもて信心のことなるより、をこりさふらふか。故聖人の御ものがたりに、法然聖人の御とき、御弟子そのかずおほかりけるなかに、おなじく御信心のひとも、すくなくおはしけるにこそ、親鸞、御同朋の御なかにして、御相論のことさふらひけり。そのゆへは、善信が信心も聖人の御信心もひとつなりとおほせのさふらひけれ

此章は施物の多少は其功德に大小ありとの説を破す

「様々」隷空本、永正本「々々」

「比興」他のことに引きかけて面白くいひなすこと

「はしひきかけ」鍋引懸と書く、こじつける、かこつけるの意

「檀波羅密」波羅密は到彼岸と譯され、生死の彼岸に渡る菩薩の行、これに六種もしくは十種を分つ、檀はつぶさには檀那、布施の義にして六或は十波羅密の第一に擧げらる

此章は以上十八章中、下八章の終文なり

「善信」親鸞の別名

「聖人」法然を指す

ば、誓願房・念佛房なんどまうす御同朋達もてのほかにあらそひたまひて、いかでか聖人の御信心に、善信房の信心ひとつにはあるべきぞとさふらひければ、聖人の御智慧才覺ひろくおはしますに、一ならんとまうさばこそひがごとならめ、往生の信心にをいては、またくことなることなし、たゞひとつなりと御返答ありけれども、なをいかでかその義あらんといふ疑難ありければ、詮ずるところ聖人の御まへにて、自他の是非をさだむべきにて、この子細をまうしあげければ、法然聖人のおほせには、源空が信心も如來よりたまはりたる信心なり、善信房の信心も如來よりたまはらせたまひたる信心なり。別の信心にておはしまさんひとは、源空がまいらんずる

「誓願房・念佛房」いづれも法然の弟子

淨土へは、よもまひらせたまひさふらはじとおほせさふらひしかば、當時の一向專修のひとゞのなかにも、親鸞の御信心にひとつならぬ御ことも、さふらふらんとおぼえさふらふ。いづれもゝ、くりごとにてさふらへども、かきつけさふらふなり。露命わづかに枯草の身にかゝりてさふらふほどにこそ、あひともなはしめたまふひとゞの御不審をもうけたまはり、聖人のおほせのさふらひしをもむきをも、まうしきかせまいらせさふらへども、閉眼ののちは、さこそしどけなきことどもにてさふらはんずらめと、なげき存じさふらひて、かくのごとくの義どもおほせられあひさふらふひとゞにも、いひまよはされなんどせらるゝことのさふらはんときは、故聖人の御こゝろにあひか

「あひともなはしめ云々」自分に相伴ふ人の質問も受け、聖人の仰せも申し聞かせはしたが

「しどけなきことども」自分が死んだ後は信徒の信仰も亂雜になつてしまうだらう

「かくのごとくの義云々」數義上について色々對論する人々に

なひて、御もちゐさふらふ、御聖教どもを、よく〳〵御らんさふらふべし。おほよそ聖教には、眞實權假ともにあひまじはりさふらふなり。權をすて、實をとり、假をさしをきて眞をもちゐるこそ、聖人の御本意にてさふらへ。かまへて〳〵、聖教をみみだらせたまふまじくさふらふ。大切の證文ども、少々ぬきいでまいらせさふらふて、目やすにして、この書にそへまいらせてさふらふなり。聖人のつねのおほせには、彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと、御述懷さふらひしことを、いままた案ずるに、善導の、自身はこれ現に罪惡生

「權假」方便

「かまへて」注意して

「みみだらせ」見落らせなり

「そくばく」擧げて數へ難き意

「自身はこれ」以下善導の『散善義』にあり

死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしづみつねに流轉して、出離の緣あることなき身としれといふ金言に、すこしもたがはせおはしまさず。されば、かたじけなくも、わが御身にひきかけて、われらが身の罪惡のふかきほどをもしらず、如來の御恩のかたきことをもしらずしてまよへるを、おもひしらせんがためにてさふらひけり。まことに如來の御恩といふことをばさたなくして、われもひとも、よしあしといふことをのみまうしあへり。聖人のおほせには、善惡のふたつ、總じてもて存知せざるなり。そのゆへは、如來の御こゝろよしとおぼしめすほどに、しりとをしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおぼしめすほどに、しりとほしたらばこそ、あしさをし

「カタジケナクモ」假名本、永正本「カタジケナク」

「さたなくして」言はずして

りたるにてもあらめど、煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごと、たわごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますとこそ、おほせはさふらひしか。まことに、われもひとも、そらごとをのみまうしあひさふらふなかに、ひとついたましきことのさふらふなり。そのゆへは、念佛まうすについて、信心のをもむきをもたがひに問答し、ひとにもいひきかするとき、ひとのくちをふさぎ、相論のたゝかひかたんがために、またくおほせにてなきことをも、おほせとのみまうすことあさましくなげき存じさふらふなり。このむねをよくよくおもひとき、こゝろえらるべきことにてさふらふなり。これさらにわたくしのことばにあらずといへども、經釋のゆくぢもしらず、法文の淺深をこゝろえわけたることもさふらはねば、さだめておかしきことにてこそさふらはめども、故親鸞のおほせごとさふらひしをもむき、百分が一、かたはしばかりをもおもひいでまいらせて、かきつけさふらふなり。かなしきかなや、さひはひに念佛しながら、直に報土にむまれずして邊地にやどをとらんこと。一室の行者のなかに信心ことなることなからんために、なく〳〵ふでをそめて、これをしるす。なづけて歎異抄といふべし。外見あるべからず。

後鳥羽院御宇法然聖人他力本願念佛宗興行す于時興福寺僧侶敵奏之上御弟子中狼藉子細あるよ

「火宅無常の世界」『法華經』に生死無常の世界の不安なることを火のつける屋宅に譬へたるより來れるもの

「おもひとき」思ひ解きなり

し無實風聞によりて罪科に處せらるゝ人數事

一、法然聖人并御弟子七人流罪又御弟子四人死罪にをこなはるゝなり

聖人は土佐國番田といふ所へ流罪。罪名藤井元彦男云々　生年七十六歳なり

親鸞は越後國罪名藤井善信云々　生年三十五歳なり

淨圓房　備後國　澄西禪光房　伯耆國

好覺房　伊豆國　行空法本房　佐渡國

幸西成覺房　善惠房二人同

遠流にさだまるしかるに無動寺之善題大僧正これを申あづかると云々

遠流之人々已上八人なりと云々

被行死罪人々

一番　西意善綽房

二番　性願房

三番　住蓮房

四番　安樂房

二位法印尊長之沙汰也

親鸞改僧儀賜俗名仍非僧非俗然間以禿字爲姓被經奏問畢彼御申狀于今外記廳納と云々

流罪以後愚禿親鸞令書給也

右斯聖教者爲當流大事聖教也

於無宿善機無左右不可許之者也

釋蓮如御判

東洋生命

吉岡彦一郎

東洋生命は

契約者の爲めに、社會の爲めにを信條とし、青淵澁澤榮一先生の謂ゆる義利兩全を及ばずながら理想として進んで居ります。

東洋生命は

從つて營業廣告と社會奉仕とを出來るだけ一致させようと心がけてゐます。此修養叢書の刊行もさうした企ての一つです。

東洋生命が

人さまに間々强ひても生命保險の御加入をお勸めすることは、父や母や夫やを不意になくして急に不幸に沈む人々を相互扶助の力でお救ひしたいと云ふ考からです。

東洋生命は

このさゝやかな册子が、それを手にした人々にさうした意味で生命保險とわが東洋生命とが記憶される機緣とならんことを切望して止みません。

東洋生命の奉仕出版

御希望の方は住所氏名楷書にて明記送料として二册につき二錢の割に郵便切手封入の上下越申御へ部公奉命生洋東内ノ丸京東。いさ

修養叢書

(1) 明治天皇御製歌百首
(2) 遠澤青淵 處世訓言集 ―改國―
(3) 邦譯論語
(4) 普勸坐禪儀 正法眼藏辨道話
(5) 歎異抄 正信偈
(6) 立正安國論
(7) 不動智神妙錄 遠羅天釜
(8) 念佛大意 諸人傳說の詞
(9) 緒老名聖正 片言居要

名勝古典叢書

(1) 抽登齊藤正謙 下岐蘇川記
(2) 山陽頼襄 耶馬溪圖卷記
(3) 壇浦と古典
(4) 吉野と古典
(5) 抽登齊藤正謙 南游志
(6) 湊川と古典
(7) 橫南鄕著西遊記摘錄 阿蘇雲仙霧島
(8) 松尾芭蕉 奥の細道

御二人で一つの保險に御入りになれ

御家庭の圓滿、御事業の繁榮に無くてならぬ

——聯合長壽保險

保險にして貯金を兼ね、利殖に於て尤も御有利

健康に自信を御持ちの方に、うつてつけの

——長壽組合保險

右の二つは、我社獨特の、最も現代に即した保險でございます。

切に御加入を御すゝめいたします。御報を頂きますれば早速説明書

御送り申上げます。

昭和八年五月二十五日印刷
昭和八年五月三十日發行 〔非賣品〕 3
昭和十年七月一日十九版發行

正歎 東京市麹町區大手町二丁目八番地
東洋生命保險株式會社代表者
信異 編輯兼發行者 木村雄次
傷抄 印刷者 東京市芝區西久保巴町三十番地 近藤喜七

終